吹田市
文化財ニュース

No. 17
平成8年3月29日
〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号
吹田市立博物館
TEL (06)338-5500
FAX (06)338-9886

▲垂水南遺跡第51次調査出土　絵画土器

▲同細部

▲同細部

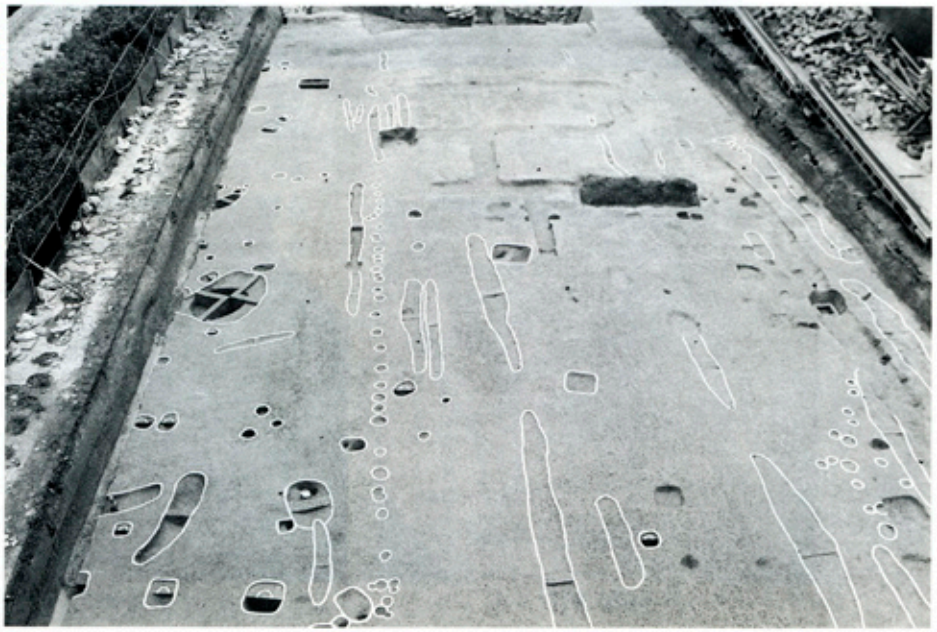
平成７年度の文化財関係事業

▲目俵遺跡で調査された建物跡

平成７年度の開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は高城遺跡、目俵遺跡、吉志部瓦窯跡、垂水南遺跡等で実施しました。

目俵遺跡は市民体育館建設に伴い事前調査を実施したもので、4600㎡におよぶ大規模な調査となりました。昨年度から引き続き、７月までの調査の結果、弥生時代から中世にかけて、大きく３時期の遺跡の展開を確認しました。特に、弥生時代後期（一部古墳時代にかかる）の建物跡の発見は大きな成果でした。高城遺跡の調査は道路工事に伴うものであり、７月から平成８年３月まで調査を実施し、平安時代後期を中心とする建物跡、溝等が確認されました。特に幅1.25ｍ～4.0ｍの溝を伴う建物群の確認は当地一帯の歴史を考える上で大きな意味を持つものです。吉志部瓦窯跡の調査も道路工事に伴う調査ですが、これまでの調査で確認した工房跡の東側にさらに工房が続いていることを確認しました。調査は４月～９月にかけて実施し、建物の柱穴や井戸等を確認しましたが、その北側にはなにもない空間地を確認し、この地

▶吉志部瓦窯工房跡の調査



▶高城遺跡の調査（現地説明会）

点が瓦の乾燥や集積が行われた場所ではないかと考えられます。垂水南遺跡では建築工事に伴い、３～４月および11月～12月に２か所で調査を実施し、古墳時代の竪穴住居等を確認すると共に多量の土器が出土しました。

埋蔵文化財以外では、10月に円照寺准胝観音堂（奥之院）の建替に伴い、大阪工業大学の青山教授に調査を依頼しました。調査の結果、18世紀ないしは19世紀の建築と考えられ、その後、何回かの建替が行われている等、興味深い事実が明らかとなりました。また、建物の解体後、その基壇部分について、その範囲の確認と礎石の位置の記録を取るとともに、発掘によって、基壇の築造方法の確認を目的とする考古学的な調査も実施しました。

文化的遺産の保存と活用を図るために、文化財保護法や大阪府文化財保護条例により指定されたものその他市内の有形文化財の保存修理等を行っていますが、本年度は都呂須、川面、六地蔵の各自治会の地車の保存修理に対する補助を行いました。また、山田権六おどり、山田伊射奈岐神社太鼓神輿、泉殿宮神楽獅子の無形民俗文化財に対して奨励金を交付しました。

その他に文化財を活用し、広く理解してもらうために市内の遺跡等の所在地に説明板を設置していますが、今年度は竹谷町の総合運動場内に運動場の建設前に発掘調査を行ったST12号須恵器窯跡の説明板を設置しました。

また、発掘調査後、出土した遺物の整理作業を進めてきた五反島遺跡の報告書の第１冊として自然科学編が刊行されました。これは出土した木材、人骨、獣骨等の分析を専門の先生方に依頼して報告をいただいたものです。

▲円照寺准胝観音堂基壇部分の調査

垂水南遺跡第51次調査の概要

垂水南遺跡は弥生～中世の複合遺跡です。今回の調査は平成７年11月から12月まで吹田市垂水町３丁目において実施したもので、竪穴式住居・土坑・柱穴・ピット群・落ち込み・土器群等の古墳時代の遺構と多くの遺物を検出しました。ここにその成果を報告することとします。

１．主な遺構

竪穴式住居跡

L字状の小溝を２条、方形落ち込みを１基確認し、北西に位置するものから住居跡１～３としました。住居跡１は幅約15cm、深さ約７cmを測るもので、住居の壁溝と思われます。この溝から直角に幅約12cm、深さ約７cmを測る小溝が取りつき、間仕切りの溝の可能性があります。住居跡２は幅約13cm、深さ約４cmを測り、住居跡１の内側に位置するL字状の小溝です。周辺に径約５～10cm、深さ約５cmの小ピットが10基認められますが、いずれの住居跡に伴うものか特定できません。住居跡３は深さ約10cmを測る方形の落ち込みを部分的に検出しました。床面はほぼ平坦で、径約25cm、深さ約25cmの柱穴を検出したほか、径約５～20cm、深さ約８cmの小ピットを８基認めました。

溝

溝１は東西方向のもので、幅約120cm、深さ約30cmを測ります。溝２は幅約100cm、深さ約20cmを測るもので、溝１とほぼ同一方位です。

土器群

濃密な土器群を検出しましたが、出土状況に規則性は認められず、破片が多いことから、近隣の住居域から排出された土器溜まりと思われます。出土土器は、土師器（壺・甕・高杯等）、須恵器（甕）、製塩土器等があります。古墳時代前期～中期のものと思われます。

２．まとめ

今回の調査の結果、新たに竪穴式住居３棟、土坑４基、溝３条、落ち込み２か所を検出しました。調査区全体をみると北西部に落ち込みがあり、北東部から南西部にかけての微高地に住居域が展開していたと考えられます。住居跡は総じて遺存状態が悪く、床面はすでに削平され、壁溝が部分的に残るにすぎず、古墳時代の住居の実態を把握するまでには至りませんでしたが、住居跡１で間仕切り溝と思われる溝を検出できたのは成果です。間仕切り溝については、従来、屋内空間を分割するために設けられ

▲土器群（南から）

▲同細部（西から）

た溝と考えられてきましたが、近年、木材を埋め込んで、その上に板材をわたして床を張り、寝所とする、転し根太の痕跡とする意見もあり、当時の生活様式を解明する上で注目すべき遺構といえます。

出土遺物は、ほとんどが古墳時代前期～中期の土師器で、その中で注目すべきものとして絵画土器があります。これは古墳時代前期（約1,600年前）のもので、その形は甕という米を炊くための土器と同じものです。しかし甕の外面はすすで真黒になっていることが通常なのに、この土器にはほとんどすすがついていません。そのかわり、肩の部分に「絵」が2か所、ヘラのような工具で描きこまれていました。この時代の甕に「絵」が描かれた例は今までほとんど知られていません。吹田市では初めての出土で興味深いものです。

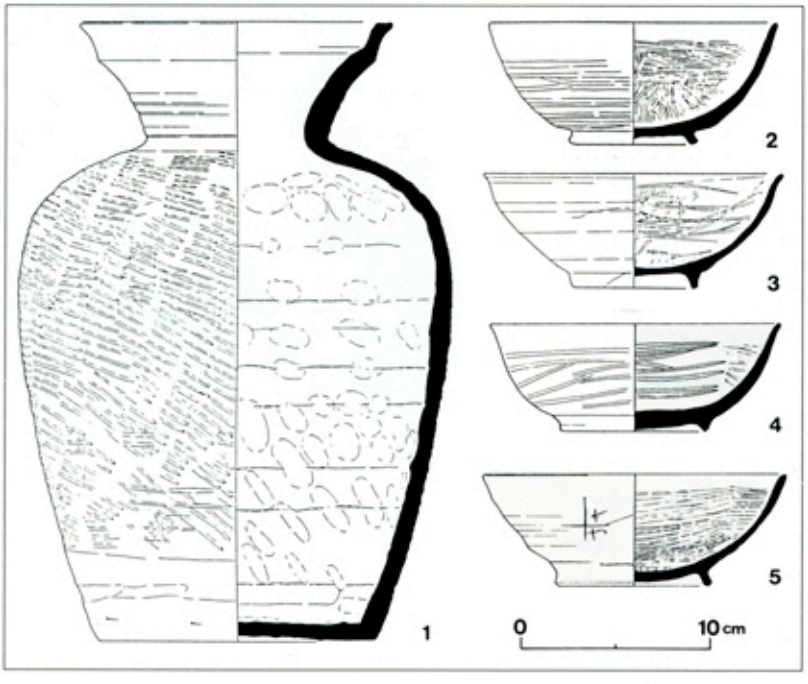
さて、この「絵」は何を表したものでしょうか。一番線のはっきりしている部分をよく見ると大きい長方形の中に小さい長方形があり、外側の枠に向かって斜めの線が描かれています。外側の枠には下側に弧状の曲線がくっついています。これを甕の真上から眺めると、「盾」の形を簡素に表したものに見えてきます。八尾市の美園古墳（4世紀末）から出土した家型埴輪の壁に4枚の「盾」の絵が描かれていますが、垂水南遺跡のものは余分な線を減らして全体の特徴だけをとらえて描いているようです。もう一方については磨滅しているため、何を表現しようとしていたのか現在ではわかりませんが、上辺のまっすぐな「盾」を描いていた可能性があります。弥生時代には「絵」が描かれた土器は多数見つかっており、いずれもお祭りに使ったと思われる「壺」に描かれるのが普通です。この土器は、本来の米を炊くという用途には使われずに、なんらかの祭りに使われたのかもしれません。

▲竪穴式住居跡、土坑（南から）

▲溝2・3（南から）

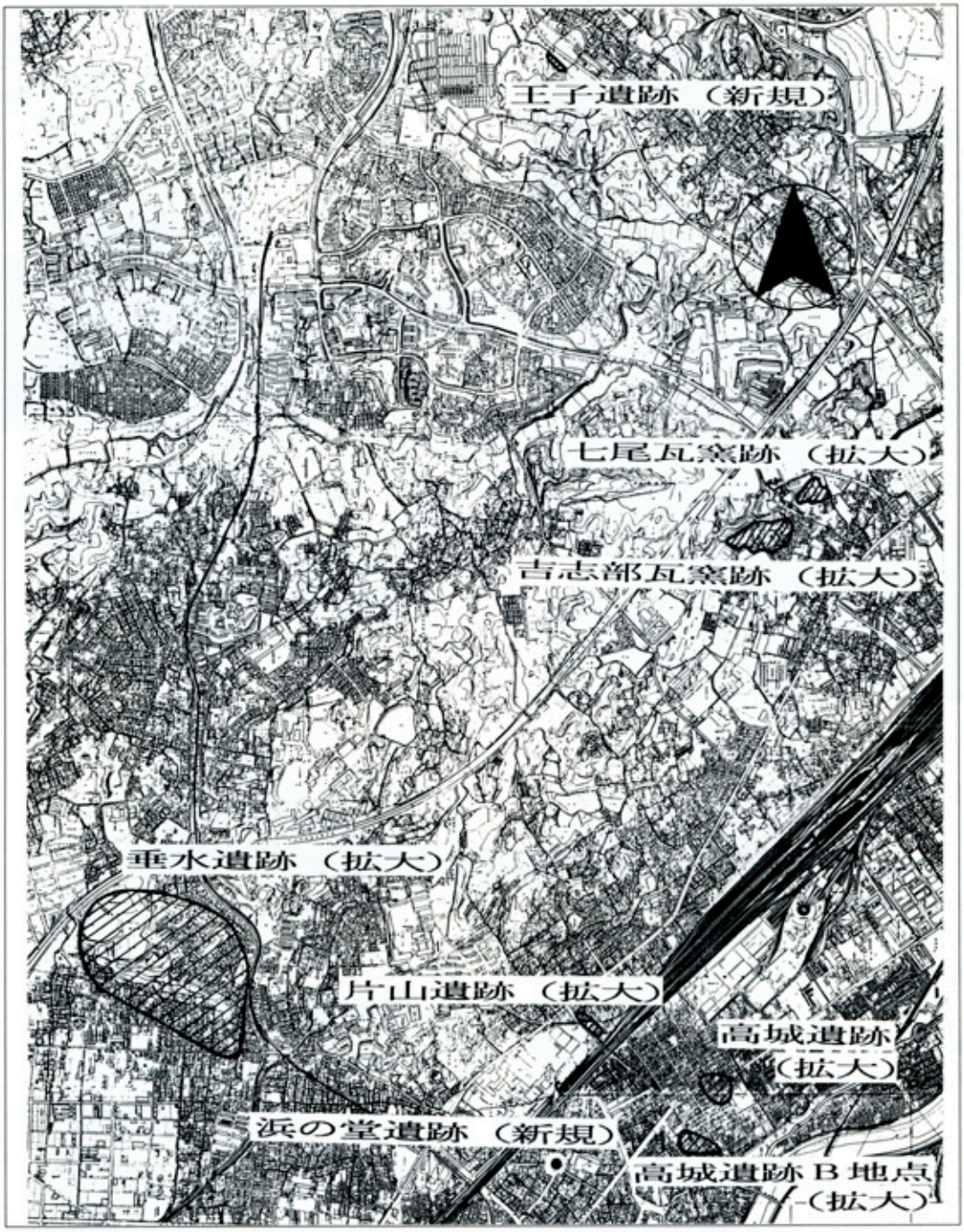
瀬戸内海を渡ってきた土器

1986年に発掘調査した五反島（ごたんじま）遺跡では10万点にもおよぶ土器が出土しており、現地での発掘調査の終了後、その整理作業を行ってきました。出土した土器を詳しく調べていくと、いろいろと興味深いことが解ってきます。平安時代から鎌倉時代にかけての土器の中に、市内の同時期の遺跡でよく出土する土器とは使われている粘土やその作り方が全く異なるものがあります。図に載せた土器は平安時代末ごろのものですが、畿内で作られた土器ではなく、1の須恵器壺（すえき　つぼ）は南九州の窯跡で同様の製品が見られます。2・3の土師器椀（はじき　わん）は瀬戸内地域で見られるもので、2は現在の岡山県から広島県東部にかけて、3は四国北部や広島県西部から北九州にかけて見られるものです。4は内面に炭素を吸着させた黒色土器（こくしょくどき）A類の椀で、同様のものが四国の遺跡で見られます。また、5は内外面に炭素を吸着させ黒色土器B類の椀で北部九州のものです。このように、これらの土器は瀬戸内地域を中心とする西日本の各地の遺跡で出土する土器と同じ特徴を持つことから、各地から五反島遺跡に運び込まれたことが解りました。この時期は、発見された大規模な堤防が築かれ、使われていた時期であり、三国川（神崎川）の開発に大きな労力が使われていた時期です。また、三国川が西日本から京都、平安京への海上交通路として重要な意味を持つようになりました。そのことは西日本各地から運ばれた100点以上の土器の出土が、その頻繁な往来の証しとなります。このように、他地域から運ばれてきた土器が多く出土する遺跡は、五反島遺跡のように神崎川から淀川流域に多く見られますが、これらの土器は大半が日常に使われた椀、皿といった食器類であり、京都へ向かう人々による、活発な水上交通の姿が浮かび上がってきます。



◀ 1 須恵器壺　2・3 土師器椀　4 黒色土器A類椀　5 黒色土器B類椀

新しく発見された遺跡

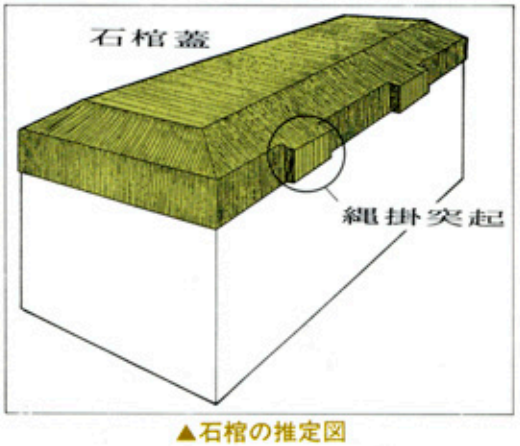


平成７年度の埋蔵文化財の調査等によって、新たに山田西３丁目で王子遺跡が、元町で浜の堂遺跡(共に中世)が確認され、七尾瓦窯跡をはじめ、６遺跡で範囲が拡大することが明らかとなりました。一帯で開発工事を予定される場合は博物館文化財保護係と協議をお願いします。

吹田の歴史をたずねて

◀石棺蓋の外側

▶石棺蓋の内側



▲石棺の推定図

▲位置図（駐車場はありません）

江坂町３丁目の素盞嗚尊神社（感神宮）境内の玉垣の中に古墳時代の石棺がまつられています。この石棺は７世紀初頭頃の家形石棺の蓋であり、現在は半分近くが埋まっているために全体の大きさは解りませんが、地上部分では高さ1.25ｍ、幅0.8ｍで、両側に省略化された縄掛突起と呼ばれる突出部が作り出されています。石材は兵庫県高砂市周辺で産出される良質の凝灰岩である龍山石と呼ばれるもので、６世紀末から７世紀には大和や河内、山城等に家形石棺として多量に運び込まれており、大和政権の中枢を担っていた豪族層に採用されたと考えられています。明治初期に社殿造営の際に出土したと伝えられるところから、神社境内地に古墳があったのであろうと推定されています。この石棺は何気なく見過ごしてしまいそうですが、この地域一帯の歴史を考える上で、欠かすことのできないものです。